

道標

みちしるべ

2015
Spring
Vol.30

2 巻頭エッセイ

まはら 三桃

壁は乗り越えなくてもいい

4 特集

平成28年度版

中学校国語教科書の紹介

15 連載 9

国語科におけるメディア教育の意義

羽田 潤

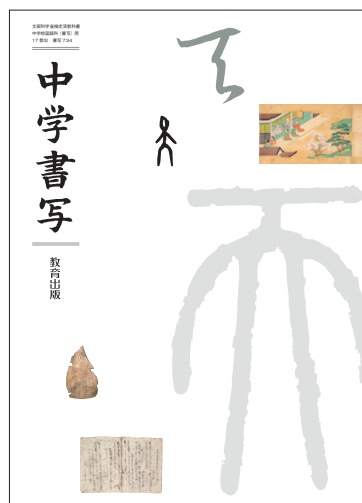
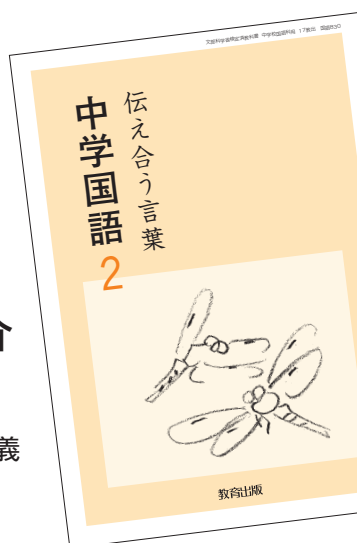
19 連載 2

『思考力・判断力・表現力』を育てる

中学国語科の学習指導

——学習指導案を「言語活動」を軸に再構成する

児玉 忠



23 連載 2

教科書の言葉・学習者の言葉

——学習指導要領と学習用語

鈴木 一史

27 書写

言語活動を最大限に生かした国語科書写教科書

——活用する力が発揮できる書写力の育成

釧持 勉

教育出版

まはら三桃

壁は乗り越えなくてもいい

私はできないことが多い子どもでした。勉強はもちろん、手先も器用でなく運動もやっとな並みというくらい。ピアノやそろばんなど、習い事もたくさんしましたが、さっぱり上達しませんでした。

できないことをやり続けるというのは、大変難しいことです。少しなりとも上達すれば、前向きにもなれますが、出ない結果に挑み続けるのは、苦行でしかありません。強い精神力が必要でしょう。私にはそんな強靱さありませんでしたから、できない経験ばかりが積み重ねられ、いつしか自信のない子どもになっていました。それでも中学校では頑張ろうと、卓球部に入部しました。真面目に練習した成果が出て、二年生のときには、たまに団体戦のレギュラーにも指名されるようになりました。しかし、そこでやめてしまいます。レギュラーのプレッシャーに負けて逃げてしまったのです。

自信がないということは、自分自身の可能性さえ、つぶしてしまうものですね。

今回の「音を追いかけて」は、当時の自分を

もう一度見つめ直す気持ちで書きました。

主人公の未来さんは、それまで順調にトランプをやってきましたが、中学校に入ったとたんつまづいてしまいます。要因はいろいろありますが、いわゆるスランプです。人が成長する前には、そんなふうに停滞する時期があるものです。皮肉なものでこんなときは、上達したいという思いが強いほどうまくいかなかったりします。あせりがさらに自分を不安定にさせてしまうからです。頑張ってきた人ほど悔しいので、もっと頑張ろうとして、ますます事態をこじれさせ、他人との関係もうまくいかなくなることもあるでしょう。けれどもそんなときこそ必要なのは、やはり冷静になることだと思います。例えば未来さんは、写真を見ます。私も学生時代は、写真や鏡をよく見ていました。当時はずきませんでした。内省という行為です。自分の顔を客観視すると心が少しは落ち着いてくるものです。また、写真は、そこに映っているものとの関係が壊れそうだと感じたときに見ていたような気がします。母親とけんかをした

時に、幼い頃の家族写真を眺めたのは、その頃の幸せを確認したかったのかもしれない。

私の好きな言葉に、「壁にぶちあたったときは、壁の前でうろろうろしてなさい。頑張つて乗り越えられなくてもいい。前でうろろうろしていれば、いずれ穴が見つかったり、壁のほうから崩れてきたりする」というものがあります。テレビ局の元プロデューサーである横澤彪さんの言葉です。

つまり横澤さんは、「逃げなければいい」とおっしゃっているのだと思います。無理して壁を乗り越えようとしなくても、つまずきの対象が見えるところにさえいれば、確かにチャンスにも気がつくというものでしょう。

さて、落ち着いた未来さんは、逃げないどころか一歩踏み出すのですが、とりあえず楽器を磨こうと思います。うまく練習ができなくても、心をこめて手入れをすることならできそうです。自信は、できることを続けているうちについてきます。結局それが壁を乗り越える力になるのではないのでしょうか。

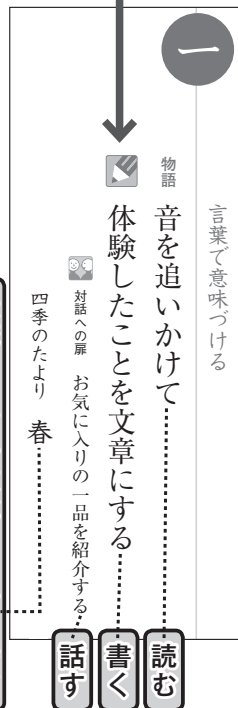
特集 平成二十八年度版 中学校国語教科書の紹介

「言葉の力」を高める「新しい単元の構成」

「言葉の力」が確実に身につく領域のバランスと教材の配列を工夫しました。

言葉と出会う 詩 ふしぎ……………金子 みすゞ 声を出そう／感想を伝え合おう／記録をしよう……………16 14 言葉で意味つける 物語 音を追いかけて……………まはら 三桃 体験したことを文章にする……………20 対話への扉 お気に入りの一品を紹介する……………28 四季のたより 春……………31 32	関係を見いだす 説明 笑顔という魔法……………池谷 裕二 フリッツを用いて報告する……………42 言葉の心意 1 日本語の音声……………45 漢字の広場 1 漢字の部首……………46	世界をひらく 読書 ベンチ……………ハンス・リベーター・リヒター 上田 真而子 訳 写真と言葉が生み出す世界——メディアリテラシー入門——……………62 芸術作品の鑑賞文を書く……………70 文法の小窓 1 言葉の単位……………73 四季のたより 夏……………74	表現に立ち止まる 詩 河童と蛙……………草野 心平 物語 オツベルと象……………宮沢 賢治 行事などの案内文を書く……………98
--	--	--	--

●一つの単元に三領域・一事項を配置した単元構成



伝統的な言語文化と国語の特質

各単元の中に、三領域・一事項の教材をバランスよく配置し、それぞれの教材の特性を生かして学習できます。

学習内容は学習過程をふまえ、段階的に「思考力・判断力・表現力」を高めることができるよう配慮しています。

各単元で扱う学習活動や言語能力について単元名として示し、三学年で系統立てた展開を図っています。

漢字の広場 2 画数と活字の字体 言葉の小窓 2 日本語の文字 102 100	五 古典と出会へ 古文 古典の扉を開く——百年後、千年後の友人であるあなたへ—— 104 古文 物語の始まり——竹取物語—— 110 漢文 故事成語——中国の名言—— 120 読書 蜘蛛の糸 芥川 龍之介 124 四季のたより 秋 136	六 説明を比べる 説明 文章の構成や表現の特徴を捉えて読む 138 ① 電子レンジの発想 古田 ゆかり 138 ② 言葉のゆれを考える 三井 はるみ 142 ③ 花の形に秘められたふしぎ 中村 匡男 148 友達のスピーチを聞く 158 意見文を読み合う 160 漢字の広場 3 漢字の音と調 162 文法の小窓 2 文の成分 164	七 発想を広げる 報告 言葉がつなぐ世界遺産 橋本 典明 166 図表を用いて報告する 178 四季のたより 冬 182	八 考えを共有する 詩 四季の詩(安西 冬衛/ジャン・コクトー 堀口 大夢訳/八木 重吉/三好 達治) 184 文法の小窓 3 単語のいろいろ 186 漢字の広場 4 熟語の構成 188 小説 少年の日の思い出 ヘルマン・ヘッセ 高橋 健二訳 190 アイデアを出して話し合う 平井 伯昌 206 言葉と仕事 言葉の上達は競技を上達させる 210
--	--	---	---	---

▲1年P. 2-5「目次」

- 一年生……小学校の学習を円滑につなげる。(導入單元など)
- 二年生……指導内容に丁寧に取り組む。
- 三年生……高等学校の国語学習へつなげる。受験や就職に向けて取り組む。(送り出し單元など)

●学年に応じた単元の特徴

各領域の教材で扱う指導事項(身につけたい力)や言語活動をいつでも確認できるようにまとめました。

目的と手段を明確にすることにより、学習の見通しと「言葉の力」の高まりを意識づけることをはかっています。

言語活動	学習内容の重点
話し合う	《話し合い》相手の発言/自分の考え
報告する	《話す》材料を集める/事実と意見/話の構成/わかりやすい語句
スピーチを聞く	《聞く》必要に応じた質問/共通点・相違点
討論を行う	《話し合う》話題や方向/相手の発言/自分の考え
記録する	《記述》事実の記録
随筆を書く	《課題設定・取材/構成》材料を集める/段落の構成
鑑賞文を書く	《記述》根拠を明確にして書く
案内文を書く	《推敲》表記や語句の用法・叙述の仕方
意見文を書く	《交流》意見や根拠の示し方
報告する	《全過程》目的や意図に応じて書く

▲1年P. 8「教材で扱う内容」

●「つけたい力」と言語活動を明確にし、学習の見通しをはかる

「学力向上」を実現する「読むこと」教材

「みちしるべ(学習の手引き)」で具体的な言語活動に取り組み、「ここが大事」で学習のポイントを確認する、という一連の流れを教材化しました。

言葉がつなぐ世界遺産

はしとつめ
橋本 典明

166

目標

- 筆者のものの見方や考え方を捉え、
るとともに、言葉のはたらきにつ
いての自分の考えをまとめる。
- 構成や展開に注意して読み、筆者
のものの見方や考え方に迫るため
に、要約したり要旨を捉えたりす
る。

みちしるべ

目標と振り返り

- 筆者のものの見方や考え方を捉え、るとともに、言葉
のはたらきについての自分の考えをまとめる。
- 構成や展開に注意して読み、筆者のものの見方や考
え方に迫るために、要約したり要旨を捉えたりする。

誰かめよう

この文章の中から、筆者が読者に問いかけている文と、
その答えにあたる文をそれぞれ抜き出そう。

参考

これまでの学習を振り返り、文末表現などに着目しよう。

1 深めよう

この文章で述べられている日光の社寺の世界遺産としての
のすばらしさについて、イコモスの専門家を驚かせた点を
整理しながら説明しよう。

参考

段落構成に注意しながら文章を読んでみよう。

174

考えよう

言葉・表現

この文章では、しばしば人物の語りが「」の形で引用
されている。このような引用をはききこむことで、どのよ
うな効果をもたらしているか考えよう。

②

「修復記録の蓄積(P168)」と「世代を超えた技術の伝承」(P171)について、次の課題に取り組もう。	修復記録の蓄積	世代を超えた技術の伝承
(1) 言葉の持つはたらきについて、次の表に整理しよう。	「言葉」の使われ方	「言葉」の果たす役割
(2) 筆者の「言葉」に対する捉え方について、文章にまとも めよう。		

▲1年P.166・174～175「言葉がつなぐ世界遺産」

●目標と振り返り

教材の冒頭に示された目標を自分でチェックするこ
とができます。

●設問

- 学びの流れを可視化した新しい「手引き」を開発し
ました。この教材で何を学ぶのが、三ステップで明
確になります。また、限られた配当時間で無理なく扱
えるように設問数を精選しました。
- ①確かめよう……何が書かれているか
これまでに学んできた知識が身についているかを生
徒自ら確認することが出来ます。
- ②深めよう……どのように書かれているか
この教材で学ぶ内容を、文章を解釈しながら深める
ことが出来ます。
- ③考えよう……自分はどうか考えるか
理解したことをもとに自分はどうか思うのか、考えた

「ここが大事」

筆者のものの見方や考え方を捉えるために

■「要約」や「要旨」から迫る

筆者のものの見方や考え方を捉えるにあたり、「ここ」は、「要約」や「要旨」について学習しよう。

○要約……目的や必要に応じて、話や文章を短くまとめること。もとの文章の構成や表現を生かしてまとめる場合と、自分の言葉でまとめる場合とがある。

○要旨……筆者が取り上げている内容の中心となる事柄や、筆者の考えの中心となる事柄。

文章の部分、あるいは全体を要約すると、文章全体の構成や展開が明確になり、改めて筆者の思考の展開や表現の工夫に気づくだろう。

『言葉がつなく世界遺産』では、イコモスの専門家たちを驚かせた日光社寺群での技術の伝承について、具体的な事例が紹介されている。筆者は、それを、段落構成を考えながら別の箇所と大きくまとめている。事例の箇所とまとめている箇所とを関連づけて要約すること、

筆者の説明の流れが理解できたらう。

読むことについて、筆者の考え方や立場を文章から読み取ったり、読み取ったことを他の人に伝えたりする場合には、要旨を捉えることが必要になる。

これまで見てきたように、説明的な文章では「問い」と「答え」の関係をおさえることだが、内容を理解する手がかりとなる。そこから捉えた筆者の主張などは、「要旨」としてまとめる内容となる。

要約をしたり要旨を捉えたりすることは、文章の内容や筆者のものの見方や考え方を捉えるうえで大切な過程である。

また、筆者の意見にふれながら自分の意見を述べる際には、必要不可欠な作業である。どの程度の分量でまとめられるか、常に字数を意識して取り組みたい。

『言葉によるつながり』を考える

日々の生活において、先生や友達など、身のまわりの人々とのやりとりの中で、言葉によって思いが受け継がれていくように感じた体験を文章にまとめてみよう。

175

●主な新教材

一年

【物語】音を追いかけて

まはら三桃

二年

【随筆】字のない葉書

向田邦子

三年

【随筆】立ってくる春

川上弘美

【小説】私

三崎亜記

【詩】自分自身に

吉野弘

説明的文章

一年

【説明】電子レンジの発想

古田ゆかり

二年

【説明】言葉のゆれを考える

三井はるみ

三年

【説明】日本の花火の楽しみ

小野里公成

【説明】水の山 富士山

丸井敦尚

【随筆】花を贈る

鷺田清一

●「ここが大事」

ことを言葉にして表現することができます。また、友達のと比較することで協働的な学びにもつながります。

「つけたい力」を確実に定着するためのポイントを認するとともに、次の学習に向けて考えを深めることができます。

●領域関連

「読むこと」教材と、「話すこと・聞くこと」「書くこと」を関連させて学ぶことを可能にしました。

興味や関心の幅を広げ、主体的に課題に取り組む「読書」「メディア」教材

読書や情報活用によって、自立した読み手を育て、課題を解決する力を養います。

●情報を活用する読書活動

夢を跳ぶ

佐藤 真海

目が覚めた時、私は手術室のベ
は静か。物音一つない。ライ
が白く浮かび上がっていた。ど
しい。まだ麻酔が残っていた。ほ
真つ先に浮かんだのは、「もう、
いう思いだった。現実を受け入れ
足を見ることはできなかった。
二〇〇二年四月、私は右足離
足首の骨に悪性の腫瘍ができて
十九歳で大学二年生の時だった
院に行ったところ、緊急入院を



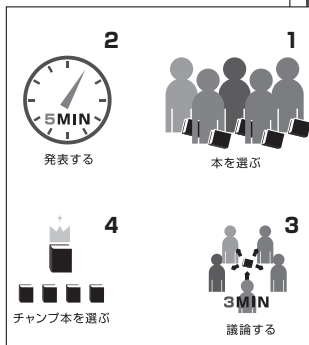
ロンドンパラリンピックでの様子。

▲2年P.54・56「夢を跳ぶ」

●さまざまな方法で集めた情報の中
から適切なものを選び、自分の考
えをまとめる。

54

ビブリオバトルのやり方



▲3年P.70「無言館の青春」

わが国を代表する近代作家を系統的・網羅的におさえています。作品の内容を捉えることや、作家について興味をもつことで、わが国の文学についての理解を深めることができます。

●近代文学に親しむ



132

▲1年P.132「蜘蛛の糸」

メディアと表現

情報を編集するしかけ

メディアにひそむ意図――

I 新聞記事を構成しよう

次のリード文を活用して新聞記者として、記事を作成させましょう。また、記事を作るにあたり、a、bどちらかの観点を選びましょう。

弓形に欠けゆく太陽、徐々に迫る暗闇——。国内の陸地で四十六年ぶりとなる皆既日食が観測された二十二日、島で、船上で、街で、世紀の天体ショーに歓喜が上った。

一方で、皆既状態が六分半近く楽しめるはずだった鹿児島県の悪石島は雨模様。「日食ハンター」たちは諦めきれない様子で空を見上げた。

a 観測できたことに重点を置く。

b 観測できなかつたことに重点を置く。

島。空を見上げる人々たちから、大きな歓声と拍手が起こった。梅雨前線の南下に気をもみながらこの日を迎えた来島者は約一万二千人。観測に成功した人は喜びに酔いしれた。

は六分二五秒。トカラ列島付近で最長とあつて注目を集めた。島の小中学校の校庭には、日食を追つて世界中を旅する日食ハンターや島民も含めて約三百人が集まつたが、午前十時半すぎから突然の大雨に。集まつた人たちは体育館に避難した。

際、徐々に迫る暗闇……。国内の陸地で四十六年ぶりとなる皆既日食が観測された二
て、街で、世紀の天体ショーに歓声が上がった。一方で、皆既状態が六分半近く楽し
富山の悪石島は雨模様。「日食ハンター」たちは諦めきれない様子を空を見上げた。

島は人口が年々減っている。若者島は島人が求めて去つてゐる。観光が島の主要産業になれば、くい止められるかもしれない。そんな思いがあった。道路脇の草を刈り、観測ツア客が迷わないよう看板を立てた。島の魅力を知ってもらおうと御影（五十四町）山頂に手作りの展望台を設けた。周りの人たちは積極的に参加してくれた。日食までは道のりは長い。人間の温かさを再認識する日々だった。

大阪市立科学館（北区）によると大阪では最大で月が太陽の八二パーセントまで重なった。二〇〇二年五月二十一日朝には、月のまわりから太陽がはみ出し、リング状に輝く「金環日食」が、近畿全域で観測できるといふ。

見えた歓喜日食

雲の間黒い太陽
奄美[illegible]

大阪市立科学館の外に集まった人たちは、真闇から時折見える

▲3年P.72・74・75・78「情報を編集するしかけ」

「写真」「物語」「報道」「広告」などから情報を読み取り、さまざまなメディアの特質を考えていきます。

生徒の身のまわりに「あたりまえ」のようにあふれている情報には、必ず発信者の意図が含まれています。

「読解→解釈→熟考→評価→表現」のステップを楽しみながら学ぶことができる教材です。

PISA型読解力、全国学力調査、高校入試等でも重視され、これからの時代に求められている「読解力」「表現力」を育てます。

●課題解決のための対話


 これからの社会で求められる「対話力」について考える。
「対話力」とは何か
 多田孝志

▲3年P.192「対話力とは何か」

対話への扉
 お気に入りの一品を紹介する

「お気に入りの一品」について、自分の思いが友達に伝わるように、食べ物や写真などを見せながら紹介しよう。

【準備方】
 ①お気に入りの一品を決め、食べ物や写真などを用意する。
 ②話す内容と項目を決める。
 ③自分の思いを効果的に伝えるために、話す速度や音質、言葉の選び方、身振りや表情などを見せる。

④ペアでスピーチし、聞き合い、よかったところを伝え合う。

私の好きな一品は、このハンカチです。桜の花がえがかれています。
 気に入っている理由は二つあります。一つは……
 小学六年生の時に、友達が海外に引っ越すことになって……
 気に入っている理由とハンカチがうまくつながっている。

31

▲1年P.31 対話への扉「お気に入りの一品を紹介する」

それは動物ですか。
 犬や猫のような身近な動物なのかなあ。
 はい。
 大きさにして質問してみようかなあ。

◀2年P.17 対話への扉「質問する力をつける」

アイデアを出して話し合う

▲1年P.207「アイデアを出して話し合う」

「話すこと・聞くこと」教材では、ペアやグループによって短時間で取り組める教材「対話への扉」を設け、対話を楽しむことから始めます。このような「アクティブ・ラーニング」によって、課題を解決するために必要な合意形成の力が身につきます。

伝統文化を視覚と構造から重層的に捉える「古典」教材

受け継がれるべきわが国の伝統文化を、充実した作品と豊富な資料、美しい紙面で味わいます。

●多くの作品にふれ、学習を深める

作品の内容を読むだけではなく、多くの視覚資料を参考にしながら、作品世界を捉えることができます。

本教材の作品と関連をもたせた補充作品も充実させ、学習を深めることができます。

おくのほそ道旅程図



106

●古典の基礎知識を丁寧におさえる

漢詩の表現の特徴

『黄鶴楼にて……』や、下段の『翠岑を下る』のように、四句でてきている詩を「絶句」といい、一句が五字のものを「五言絶句」、一句が七字のものを「七言絶句」といいます。

故人西辞黄鹤楼 第一句（起句）

煙花三月下揚州 第二句（承句）

孤帆遠影碧空盡 第三句（轉句）

惟見長江天際流 第四句（結句）

文章の書き方などに応用される「起・承・転・結」というのは、ここから出た言葉です。

● 伝統的な言語文化の素養を高める
伝統芸能へのいざない（折込）

現代でも幅広い世代の人々に楽しまれている伝統芸能「落語」「歌舞伎」「狂言」について、紹介しています。



●枕草子「徒然草」の別の章段を読む。

古典随筆選

ずいひつ
——枕草子・徒然草——

ねたきもの
ねたきもの
人のもとにこれよりやも、人の返事も、書きてやりつる後
文字一二つ思ひなほしたる。とみの物縫ふに、かしこ縫ひつと思ふに、針
をひきぬきつれば、はやく尻を結ばざりけり。また、かへさまに縫ひたるも、
さういふにたがひ、
ねたし。

【第九一段】

↓P108へ

(出典) 新編日本古典文学全集18 枕草子に

▲2年P.324「古典随筆選」



敦盛 (菊池 契月)

▲2年P.112「敦盛の最期」

旅への思い

七月四日 出雲崎
たよらだ。
荒海や佐渡によたふ天河
荒海の向うにある佐渡へかけて天河天
の川が太く横たわっている。
市川中 金沢
あかあかと日はつれなくも秋の風
赤々と照りつける残暑の日が暑い、風は秋
らしく感じられる。
八月五日 山中
石山の石より白し秋の風
吹き過ぎる秋風が、那谷寺の白くさらされた
石よりも白い感じがする。
八月下旬・九月 大垣
『奥の細道行脚之図』より
芭蕉（左）と弟子の曾良

107

▲3年P.106・107「旅への思い」

ながむれば 衣手涼し ひさかたの
天の川原の 秋の夕暮れ
式子内親王
稲かれば 小草に秋の日のあたる
蕪村



「夕映え」(嵯峨文 昭和時代)

▲1年P.136 四季のたより「秋」

●作品をとおして季節感を味わう
「四季のたより」(コラム)

四季折々にまつわる短歌、俳句、季節の言葉を、美術品などのさまざまな文化のつながりとともに味わいます。



『附子』——その方から吹く風に当たっても死ぬと主人に言わ
ように扇であおぎながら見ようとする太郎冠者(手前)。(写

▲3年折込9・10「伝統芸能へのいざない(狂言)」

発見から理解へとつなげる「言語」教材

日常の言語生活から、言葉のはたらきや
仕組みを発見し、活用する力を育てます。

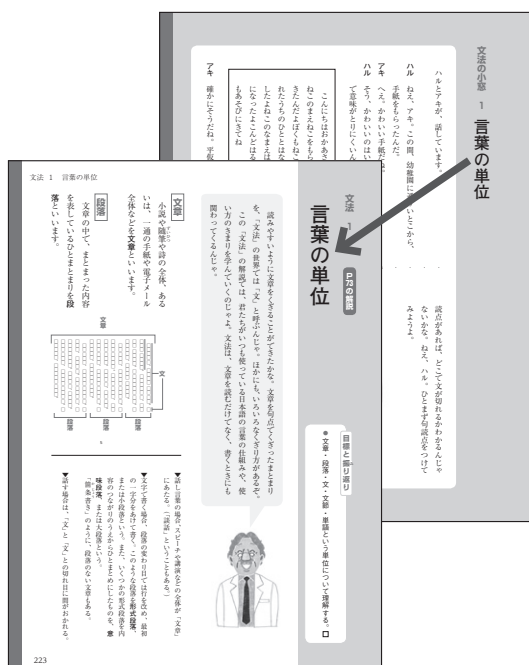
●活用力を高める言語教材の二つのステップ

発見する・気づく——導入教材「言葉の小窓」「文法の小窓」

全ての言語教材に、一ページの導入教材を設けました。

理解し、活用する——体系化した解説教材

解説教材では、言語の知識・理解を進めるとともに、実
生活などで活用できる力を高めます。



▲1年P.73・223「言葉の単位」

著名デザイナーによるシンプルで品格ある教科書

学習者が親しみやすく、
学びやすいデザインを実現しました。

アートディレクション

K2 長友 啓典（ながとも けいすけ）



一九六一年桑澤デザイン研
究所卒業、日本デザインセン
ター入社。一九六九年黒田征
太郎とK2設立。一九八四年
講談社出版文化賞【さしえ
賞】、二〇〇六年第三七回講
談社出版文化賞【ブックデザ

イン賞】受賞。現在、さまざまなアートディレクションやエッ
セイ、連載などを手がける。

【表紙の画家】

熊谷 守一（くまがい もりかず）一八八〇—一九七七

現在の岐阜県中津川市付知町生まれ。独特の輪郭と色彩に
よる作品は、日本の近代洋画において独自の画風を切りひら
いた。自然の草花、生物、風景などを丹念に観察し描写した
絵には、「いのちの輝き」、そして「古きよき日本」を思わせ
るノスタルジックな感覚を覚える。

近年、各地で展覧会が催されるなど再評価が進んでいる。

国語科におけるメディア教育の意義

兵庫教育大学准教授 羽田 潤^{はだ じゅん}

一 はじめに

連載の第七回、第八回では、少し教科書から離れた発展的言語活動について紹介した。第七回では、「映像版『ごんぎつね』の広告ポスター制作」、第八回では、「象のドキュメンタリーふうミニドラマ制作」と、メディアを活用した言語活動における「社会文化性」の枠組みづくりについて述べてきた。今回は、平成二十八年度版の新教科書の「メディアと表現」単元から、第一学年『写真と言葉が生み出す世界——メディア・リテラシー入門——』を取り上げ、新しくなった学習活動の具体について述べていく。

二 単元を貫く言語活動

三つの学習活動が連続で展開できるように、学習活動の精選を行ったのが新教科書の第一学年における「メディアと表現」の特徴である。教材は現行と同じものを使用しながら、より連続性を意識できる構成とした。三つの小単元は、理解単元としての「Ⅰ 詩のギャラリーへようこそ」、Ⅱ 言葉と写真のコラレーションを楽しもう、表現単元としての「Ⅲ 写真から生まれるさまざまな世界を作り出そう」で構成され、理解したことで表現し、表現することでさらに理解が深まる、「写真と文章の関係を考えること」で貫かれた言語活動単元となっている。また、この三つの小単元で理解・表現活動が一周するだ

けではない。例えば「Ⅰ 詩のギャラリーへようこそ」だけでも、連載の第二回に示したように、教科書に提示された「詩のポスター」だけではなく、学習者自身が、新たに詩と写真を組み合わせる、詩創作活動へと発展していくことも可能な素材として、教材および学習活動を提示している。

写真と言葉が生み出す世界			大単元
目標「写真と文章の関係を考え、読み手に対する効果を考える。」			
表現 ← 理解			
Ⅲ 写真から生まれるさまざまな世界を作り出そう	Ⅱ 言葉と写真のコラレーションを楽しもう	Ⅰ 詩のギャラリーへようこそ	小単元
	② タイトルと組み合わせるのにふさわしい背景写真を、本文もふまえて考える。	① 写真と詩が組み合わせられたときの効果を考える。	写真と文章の関係および学習活動
	③ 写真と組み合わせるのにふさわしいさまざまな文章を考える。		

三 「Ⅰ 詩のギャラリーへようこそ」

新教科書においても、まど・みちおの『ボタン』に四つの写真を組み合わせ、「詩のポスター」として提示している。「詩」という文章表現と、その文章表現のある部分を象徴した「写真表現」とを組み合わせ

せ、学習者の「詩」に対する解釈を呼び起こそうとするものである。教科書には、「ボタン縫い付け」「月」「トンネル」「子どもの目線」を掲載した。他にもどのような組み合わせが可能か考えてみるのも楽しい。学習活動はシンプルに、次の内容のみである。(傍線は筆者)

○あなたの心にいちばんぴたりくる詩のポスターはどれですか。ペアになって、その理由を話し合おう。

四 「Ⅱ 言葉と写真のコラボレーションを楽しもう」

特に変更が大きかったのは、『カメラが見つめたニューヨーク』(Ⅱ言葉と写真のコラボレーションを楽しもう)である。本文の文章量を減らし、タイトル部分にふさわしい写真を選ぶ活動に焦点化した。学習活動は次のとおりである。(傍線は筆者)

○タイトルや本文が同じでも、写真の有無や背景写真の違いによって印象はどのように変化するか。

- 1 ①と②を見比べて、あなたが感じたことを話し合おう。
- 2 ③④⑤の背景写真の違いは、あなたにどのようなにはたらきかけてくるだろうか。文章の中身と関係づけながら話し合おう。
- 3 背景写真②③⑤の中から、あなたが一枚選ぶとしたらどれを選ぶだろうか。その理由を説明しよう。また、読み手に対する効果についても考えよう。

今回は、見開きに、無地部(①)と四つの写真候補(②③④⑤)を並べた。全ての候補を見比べながら、どのタイトル部分が最も効果的であるかを考えることになる。組み合わせられたものを見比べるというのは、「詩のポスター」と同じ手法でもある。完成品を見比べ、印象の違い

Ⅱ 言葉と写真のコラボレーションを楽しもう

カメラが見つめた
ニューヨーク
折原 恵

最先端の摩天楼都市ニューヨークが、冷たい顔よりも、暖かい体温や人間臭さを感じさせるのはなぜだろうか。そう考えたとき気づいたのだ。写真家たちがなんとか画面に入れまいと苦心する、あの屋上の給水塔こそ、私の好きなニューヨークの都市風景を象徴しているものだ。

マンハッタンでは、六階までのビルは給水塔を必要としない。それ以上の高さのビルが造られた摩天楼形成期に、補綴人が杉の白木の給水タンクを作り始めた。世界のどこにもない、奇妙な都市景観の始まりであった。では、なぜ木造なのか。なぜ、日本のように強化プラスチックではなく、コンクリートでも金風でもなく、杉の木なのか。

ニューヨークは、世界中の大都市で最も夏の冬の寒暖の差が激しく、その差は摂氏五〇度以上にもなる。断熱効果が優れている木を使えば、水を冬に凍らせず、夏に冷たく保つのに都合がよい。しかも値段が安く長持ちする。人口の密集地帯であるニューヨークでは、飲料水だけでなく、室内自動消火装置のための水量の保持が法律で決められているため、巨大なタンクが必要となる。同

じ条件を満たすのに、他の材質では二倍以上のコストである。そのうえ、釘をいっさい使わない、中世ヨーロッパのワイン桶製法と全く同じ作りなので、貯蔵された水はおいしい。新築ビルの給水タンクの九〇パーセントが、今も木造なのだそうだ。

ニューヨークの給水塔一万個の過半数を建築し

写真と言葉が生み出す世界



いを言葉にするという手法を重ねることで、学習者に手法の定着をはかろうとするものである。情報の比較自体は、学習指導要領にも示されるように、「読むこと」における言語活動として有効な手法である。

第二学年「読むこと」言語活動例

イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと。

第二学年「読むこと」言語活動例

ウ 新聞やインターネット、学校図書館等の施設などを活用して得た情報を比較すること。

第三学年「読むこと」言語活動例

イ 論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと。

その情報が、言葉と写真の組み合わせに広がることで、例えば、通路の看板やポスター、本屋のディスプレイなど、日常生活をとりまく多様な情報を比較する思考が形成されると考える。また、そうした日常生活における分析的な目線を育むことが、メディアを活用した言語活動の重要な観点となる。

四つの候補写真の意図については、連載の第五回で詳しく述べているように、文章中の各エピソード、②ビルの屋上の給水塔、③高層建築の労働者、④桶職人、⑤移民にとつてのニューヨークの象徴（自由の女神）を表す写真を選択している。効果的なタイトル部分を考えるということは、本文内容を象徴する写真がどれであるか、「カメラが見つめたニューヨーク」というタイトルと最も響き合うのはどの写真なのかを考える行為である。本文内容の最も重要な部分が、タイトルと背景写真という形態に再構成されたのがタイトル部分ともいえる。この「再構成」を考えることが、「メディア・リテラシー入門」とし

ての本単元の重要な目的の一つであるともいえる。

「詩」という表現を、「写真と詩」という組み合わせで表現するのは、写真に、「詩」の内容がもつテーマやモチーフが再構成されているからである。ゆえに、「詩」の言葉を「写真」が補強し、「詩」がもつある側面を強調した「詩のポスター」ができあがる。同様に、「カメラが見つめたニューヨーク」という文章内容がもつテーマやモチーフを写真が補強し、タイトルとしての「表情」を決定づけることになる。

写真と言葉の組み合わせという「場」は、多様な組み合わせや相乗効果が可能であるが、本単元において言葉と組み合わせられる写真は、組み合わせ対象である言葉を写真に置き換えようとしたものとなる。同じテーマ、モチーフが、言葉という表現と、写真という表現になり、それらが組み合わせられ、一体化したものとして提示されているのが、詩のポスターであり、タイトル部分なのである。

五「Ⅲ 写真から生まれるさまざまな世界を作り出そう」

さて、これまでの二つの学習活動は、言葉と写真の組み合わせを「読み」、「話し合う」ことであつた。それをふまえて行うのが、写真を見て、組み合わせるにふさわしい文章を「書くこと」である。写真および学習活動自体は現行のものとは変わらないが、写真を見ながらの発想法として、マインドマップ的な方法を示した。中央に写真を置き、思いつくままに線をのばして書きこむ手法である。写真によって言葉は引き出され、さらに、言葉によって写真の見方が規定されていくことを、「書くこと」とおして実感してもらうための学習活動である。

選んだ写真は、具体的には、熊野古道の写真であるが、そのことを学習者が知る必要はない。山の中の道、細い道ではあるが、簡素な舗装がされている、木々は細く、光が差している、道は少し曲がり、下つ

写真と言葉が生み出す世界

日 記

時代劇



実況中継

小 説

○一枚の写真からさまざまな言葉の世界を作ってみよう。

一枚の写真から言葉を引き出してみましょう。日記ふう、手紙ふう、昔話ふう、時代劇ふう……などの設定をすると、さまざまな言葉の世界を作り出すことができます。

書きあがったら、友達と読み比べてみましょう。同じ「日記ふう」でも、違いがありませんか。写真のどこがそう感じたのかについて話し合ってみると、写真の表現方法に気づくことができます。

○一枚の写真からさまざまな言葉の世界を作ってみよう。

(第1学年P69)

六 単元を補完する「言葉の自習室」

新教科書では、単元内容を補完するという意味で、巻末付録の「言葉の自習室」に、「メディアと情報」(新規)、「瞬間を切り取る」(継続)という二つのコラムが掲載されている。「メディア・リテラシー入門」という意味では、この二つのコラムが、メディア(情報)の性質の基本である、①情報は第三者によって再構成されていることと、②情報は制作者の意図によって切り取られていることについて述べている。この二つのことを体験的に理解させようとしているのが三つの学習活動(小単元)であり、文章で説明しているのが本コラムということになる。

七 まとめにかえて——メディア・リテラシー入門という位置づけ

本単元は、「メディア・リテラシー入門」とサブタイトルがついている。ここで学習者に学ばせたいのは、言葉と写真の組み合わせという情報を扱いながら、①送り手によって組み合わせられたものが、ひとまとまりの情報として受け手に届いているのだというメディアの性質と、②言葉と写真の組み合わせによるメディア表現の多様性について知ることという、メディアの性質二点において、メディア・リテラシー入門の位置づけとなる。

この入門編を経て、第二学年では、フィクションとしての『ごんぎつね』の映像化について考え、第三学年では、ノンフィクションとしての皆既日食に関する新聞記事およびテレビ映像について考える。三年間をとおして学ばせているのは、情報の合体、転換、再構成ということになるのである。

『思考力・判断力・表現力』を育てる

中学国語科の学習指導

— 学習指導案を「言語活動」を軸に再構成する

弘前大学教育学部教授 児玉 忠こだま ただし

はじめに

本稿では、国語科の「学習指導案」に注目し、その改善という点から「言語活動」を授業に位置づけた「思考力・判断力・表現力」の育成の課題を考えてみたい。

一 学習指導案における「言語活動」

教員養成の仕事をしている関係から、各地の研究会などで公開授業を参観する機会が多く、その際に学習指導案を拝見することが多い。この学習指導案には守らねばならない規格のようなものはないが、そこには全国的にみておおむね共通の要素がある。例えば、それは次のとおりである。

- ① 授業の実施期日・時間、実施学校名、学年・学級（構成員数、男女比）、指導者名
- ② 単元名、教材名

- ③ 単元設定の理由、単元観、教材観、学習者観
- ④ 単元全体の指導目標
- ⑤ 単元全体の指導計画、配当時間
- ⑥ 評価

（全国大学国語教育学会編『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』学芸図書、二〇一〇年、P 37・38）

ここには、これまで全国各地で書かれてきた国語科の学習指導案に共通する要素が六つにまとめられている。しかし、ここには「言語活動」という観点や語句がみられない。そのため、「言語活動」について何か述べようとする場合は、「③ 単元設定の理由、単元観」のあたりで間接的に述べることになるのだろう。

「言語活動の充実」が叫ばれるようになってからというもの、「言語活動」を取り入れた国語科の授業改善の事例は増加傾向にある。しかし、そこで提示される学習指導案に注目すると、今述べた六つの

観点による従来どおりのものが多いのも実情である。そのため、その単元において「言語活動」がどう位置づけられているのか、「教材」と「言語活動」とはどのような関係にあるのか、学習者にとってその「言語活動」はどういう魅力をもっているのか、単元の「指導目標（付けたい力）」と「言語活動」はどういう関係にあるのかなどなど、はっきりと記述されないままの学習指導案が今なお多い。それは同時に、授業づくりにおいて「言語活動」への意図的・計画的な取り組みがなおなされていないことを意味している。

その意味で、「言語活動」を重視した新しいタイプの授業を考えようとするとき、学習指導案の改善という点からのアプローチは一つの方法になるように思われる。

二 学習指導案において「言語活動」を位置づけた実践事例

次に紹介するのは、『論語』を教材に中学校二年生を対象に行われた国語科の授業実践である。授業者である須郷和歌子教諭（青森県平川市立碓ヶ関中学校）は、平成二十六年度中学校教育課程地区研究集会の国語科分科会において、『単元を貫く言語活動』を取り入れた読み教材を扱う授業の課題」と題した実践報告を行った。

須郷教諭の問題意識は、次のようなものであった。

（中略）「付けたい力」を明確にし「単元を貫く言語活動」を設定した授業実践には、教材特性を生かし切れていないと感じるものが多い。以前、ある研究会で、「走れメロス」の実践が発表された。指導事項「C 読むこと」(1)イ」を受け、「登場

人物の言動の意味について自分の考えをもつ」ことが目標であり、それを達成するために設定された単元を貫く言語活動は「登場人物を招いて記者会見をしよう」である。相手意識と目的意識が明確であるし、ワークシートなどを見る限り、生徒は主体的に活動しているように見えた。が、登場人物への質問や返答の内容をみると、質（セリヌンティウスへ）二年ぶりにメロスに会ったのに、なぜ人質になることをOKしたのですか？質「竹馬の友だからです。」、質（ディオニスへ）なぜ最後でメロスたちに仲間に入れてほしいと思ったのですか？答「二人の行動に感動したからです。」といった浅いレベルの読み取りでもできてしまう一問一答が多かった。

（実践報告資料 以下同様）

こうした事例をもとに、須郷教諭は次のように述べる。

（中略）「記者会見をする」という言語活動は、どの文学的文章の学習にも使えて便利に見えるが、どのような質問をし、どのように答えれば読みが深まるかを吟味できなければ、言語活動を行わせること自体が目的化し、そこに生徒の主体的な思考・判断がはたらいっていたとしても、「読むこと」の学習としては空回りする恐れがあると感じた。

「付けたい力」にぴったりの「言語活動」を設定することは確かに重要である。しかし、国語は「教材で教える」教科である。だからこそ、「その教材で読むべきこと」「その教材だから学習できること」にこだわりたいと思う。「付けたい力」と「単

「元を貫く言語活動」との間に「教材特性（＝教材の持ち味）」をどうリンクさせるか。本発表では、「教材特性をふまえた授業づくり」について、実践例をもとに提案したい。

（傍線引用者）

須郷教諭はこのように述べ、「付きたい力」と「言語活動」を関係づけるだけでなく、そこに「教材特性」をリンクさせるべきことを強く主張する。この連載で私が取り上げている課題意識を実践レベルで共有した事例となっている。この問題意識のもと、須郷教諭が作成した学習指導案は次のような構成になっていた。

- 1 単元名
- 2 指導目標
- 3 取り上げる「言語活動」と「教材」
 - (1) 言語活動
 - (2) 教材
- 4 「言語活動」と「教材特性」・「付きたい力」との関連
 - (1) 「言語活動」と「教材特性」との関連
 - (2) 「言語活動」と「付きたい力」との関連
- 5 指導と評価
 - (1) 指導過程と指導方法
 - (2) 指導と評価の計画

この学習指導案では、先に紹介した一般的な学習指導案の構成とは明らかに異なり、「言語活動」という観点・用語が学習指導案全体を特徴づけるキーワードになっている。その点で、この学習指導

案の作成にあたっては、「付きたい力」や「教材特性」と「言語活動」が乖離しないように絶えず意識しながら、丁寧に教材研究や授業づくりが進められていることがよくわかる。

紹介された「単元名」は、「十四歳の悩み相談」『論語』の言葉を引用して回答文を書こう」であった。須郷教諭は、学習指導案の4の(1)『言語活動』と『教材特性』との関連の部分で、次のように述べている。

（引用者注）『論語』が「なぜこのように長く読み継がれてきたのか。それは、『論語』の言葉が人間の本質を突いており、日本人が悩んだり道に迷ったりしたときのよりどころとなってきたからであろう。『論語』の教材特性は、まさにこの点にある。

そこで、教材特性を生かすため、単元を貫く言語活動に『論語』の言葉に表れたものの見方や考え方を取り上げ、相手や目的に応じて自分の考えを書く」を据え、これをさらに具体化して、「相談者の悩みに対して、『論語』の言葉を一つ選んで引用し、回答文を書く」活動に取り組ませた。

これを見ると、教材『論語』のもつ「教材特性」と「相談者の悩みに回答する」という「言語活動」とを見事に結びつけて教材化していることがわかる。また、学習指導案の4の(2)『言語活動』と『付きたい力』との関連で、次のように述べている。

生徒たちに意見や考えを述べる文章を書かせると、「伝えたいこと」と根拠と具体例との間に論理の飛躍が見られることが多い。また、書き上げたことに満足してしまい、「相手に伝え

る」という意識が薄いようにも感じる。そこで、相手と目的を設定したうえで、「何を材料に使うか」を生徒に吟味させ、「選んだ材料を具体化したり、言い換えたりして、意見や考えを相手にわかりやすく伝える力」を育成したいと考えた。

これは学習指導要領の指導事項に照らし合わせると、以下に該当する。

◇第二学年「B 書くこと」(1)ウ

事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。

(中略)さらに、引用したい言葉の候補をあげ、最終的に、相談者の悩みや自分がアドバイスしたいことに最もふさわしい言葉の一つ選んで回答文を書く過程で、以下に示す指導事項も関連的に扱うことができる。

◇第二学年「C 読むこと」(1)エ

文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと。

◇第二学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」

(1)ア 伝統的な言語文化に関する事項 (イ)

古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

これを見ると、生徒の実態をふまえつつ、「付けたい力」を学習指導要領の指導事項に求めながら、取り上げた「言語活動」が、そうした「付けたい力」とどう関連しているのかを丁寧に検討してい

ることがわかる。

このように、学習指導案に書くべき項目を「言語活動」を軸に再構成することによって、授業者は取り上げた「言語活動」がいかに「教材特性」と密接に結びついているか、また、いかに「付けたい力」と密接に結びついているかを検討することになる。見方を変えれば、「言語活動」を取り入れた新しい学習指導案のフォームが、指導者に取り上げた「言語活動」の内実をつよく自覚させ、授業における「言語活動」を内実のともなったものにさせているのである。連載の第一回で述べたような「言語活動」の空転(活動あつて学力なし)といった状態を避け、「思考力・判断力・表現力」を確実に育てるためには、学習指導案を「言語活動」の観点から再構成して国語科の授業づくりを行うことが一つの方法になるように思われる。

おわりに

平成二十八年度版の教育出版社の新しい教科書には、この連載で主張しているような「付けたい力」や「教材特性」としっかり関係づけられた「言語活動」が多彩に掲載されている。次回は、そうした新教材を具体的に取り上げて、「言語活動」を授業に位置づけた「思考力・判断力・表現力」の育成の課題について考えてみたい。

教科書の言葉・学習者の言葉

学習指導要領と学習用語

はじめに

新しい考え方を取り入れるときには、新しい言葉を作り出す。明治期の海外文物の導入の際には多くの言葉が作り出されてきた。「現代」「社会」「生活」など、今ではあたりまえのように使われている言葉も訳語として作り出されたものでありⁱ、それらを合わせてまた新概念を作り出した。教育についても同様である。例えば、「知識基盤社会」というような言葉は新しい考え方の訳語として作られたといえる。したがって、「それはどのようなことを意味しているのか。」という定義が重要になってくる。ところが反対に、新しい考え方の枠組みではあるけれど、それを従来ある言葉の組み合わせで表すこともある。「生きる力」などはその典型であろう。この場合は、新しい概念であるにもかかわらず、わかりやすくするために既存の言葉を使うことによって、かえって混同してしまう場合がある。

この二つの言葉の定義を確認すると、「知識基盤社会」については、以下のように示されている。

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。ⁱⁱ

一方、「生きる力」については、

「生きる力」Ⅱ知・徳・体のバランスのとれた力
変化の激しいこれからの社会を生きたために、確かな学力、豊かな心、健康やかな体の知・徳・体をバランスよく育てることが大切である。ⁱⁱⁱ

確かな学力

基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力

生きる力

豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

健康・体力

たくましく生きるための健康や体力

という理念であり、その中の一つ一つが上の図のように示されている。

しかし、こちらの言葉に対する反応は、「どのような意味か。」ということは問題にされず、「生きる力はやっぱり大切な。」とか「うちの子たちには生きる力だけはあるなあ。」といった言葉が返ってくる。つまり、「生きる力」は教育の中で使われるときに、

茨城大学教育学部准教授

鈴木 すすき

一史 かずふみ

限定的に特別の意味内容をもつにもかかわらず、言葉そのものは一般的に使われる言葉であるために、使う人それぞれの解釈が可能となり、それぞれが自分の意味と結びつけて考えて使用してしまう。

このように、一般的に使われている言葉と教育の中で使われている言葉は区別が難しいが、教育という文脈の中でどのような意味をもつのが特定されることによって、理解が進んでいくといえる。これは、その教科の学習のために必要な語彙である学習用語についても同様であり、一般的に使われる言葉と学習で使われる言葉を明確に区別してその意味内容を把握していくことが、学習者にとっての学習を理解しやすくしていくものと考ええる。

さてそこで、今回は、まず学習用語に迫る前に「教育用語」「指導用語」といわれるものについて考えてみたい。方法は、学習指導要領に表れる言葉を抽出して、指導用語として取り扱う。その後(次号)、それらがどのように学習用語として学習者のもとに届くのかについて、教科書の中の「指導用語」を「学習用語」として捉えていく。

学習指導要領の中の言葉

学習指導要領は教科書のもととなるものであり、学習指導の根幹をなしている。この学習指導要領にある言葉は、前述したように一般用語ではなく教育用語として教育的な文脈で読む必要がある。学習指導要領解説^{iv}には、第一章「総説」から第四章「指導計画の作成と内容の取り扱い」までの記述がなされているが、これらは学習指導要領の目標にあげられている言葉を、どのような意味で取り扱って解釈していけばよいかについて書かれており、その言葉を分析することで学習指導要領の重点箇所を読み解くことにつながる。また、使われてい

る言葉の使用頻度を分析することで、数量的な観点から読み解いていくことを目的とした。そこで、学習指導要領に出てくる言葉をピックアップしてみると、以下のようなになる。順序は、多く出現した順である。各学年で十回以上出てくると仮定し、全体で三十回以上出てきた語をあげた^v。また、今回、本文で具体的にに取り上げた語については傍線を付した。

学年	指導	文章	事項	考え	自分	言語	内容	能力	生活
表現	理解	活動	構成	国語	必要	語句	漢字	学校	学習
目的	社会	仕方	展開	工夫	態度	効果	文化	情報	活用
注意	相手	意見	古典	読書	意味	関連	課題	言葉	知識
話題	部分	材料	立場	伝統	特質	事柄	日常	育成	書写
説明	目標	文字	関係	特徴	意図	場面	事実	整理	全体
関心	論理	資料	生徒	具体	作品	重視	場合	役割	計画
取材	評価	設定	時間	教育	教材	配当	方法	程度	領域
人物	配慮	働き	互い	登場	形態	根拠			

いちばん多く出てくる語は「学年」である。これは、全ての文言についてカウントしたためである。次には「指導」や「事項」など、教科としての国語の指導「内容」に関わる語ではなく、全体的な枠組みを示す語彙が示されている。また、「能力」や「生活」などの言葉が上位に来ていることから、学習指導全般にわたって、学習者の「生活」を念頭に置いた指導や、学習者の「能力」を考えた学習指導が求められていることがわかる。能力と対照される「知識」も「能力」より頻度は少なく出現する。

次に、「言語」「活動」「表現」「理解」といった言葉が上位にある。

言語活動の充実が求められていることは周知のとおりであるが、頻度面からほぼ同様の上位に位置しており、繰り返しこの言葉を使って説明がなされていることが読み取れる。また、「思考」「判断」「表現」とまとめて語られる語彙については、国語の中では「表現」のみ突出している。半面、「理解」が同列に並んでいることを考えると、この二語が対応関係にある。ということは、国語科の中の言葉としては、「判断」や「思考」が定着しにくく、「思考・判断・表現」というセットで学習を考えていく方向性が薄くなっているのかもしれない。国語科の学習指導要領では、現在の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という領域別とは異なり、「理解」「表現」という枠組みで書かれていた歴史をもっていた^{vi}ことも、この言葉の意味づけの変化への対応を遅らせていた一要因である。

次に、国語科特有の語彙を探すと、「国語」から始まって、「語句」「漢字」とあげられている。これは「知識」の部分に類する学習内容であり、国語科の学習が言語の学習を基盤としていることを意味している。国語科の学習が、社会科や理科や道徳といった学習と混同され、明確な区別なく用いられた時期もあり、かつまた、反対に、それらとは区別すべく線引きに躍起になった時期もあった。しかし、国語科の学習は、さまざまな内容を扱っていきながらも、言語の学習だといえる。

学習内容の言葉として、「構成」や「展開」が繰り返し使われていることがわかる。「理解」や「表現」のどちらにしても、構成や展開を考えた指導をし、その能力の育成が求められている。次に、このことが学習指導としてどのように取り扱われてきたかについて確認す

る。『国語教育指導用語辞典』^{vii}では、「構成」という項目は立てられてはいないが、「構想」と「説明文」の項目の中に、以下のように述べられており、「展開」という言葉とともに使われている。なお、傍線および二重傍線は筆者が付したものである。

「構成する」というのは、すでに題材等がきちんと用意されていて、それをどう配列し、組み立てるかという意味合いが強い。(中略)すでにできあがっている文章・作品(教科書の文章・作品や児童・生徒の文章・作品など)の構成をとらえて、筆者・作者は、なぜこういう構成にしたのかを考えさせる指導がある。――ほかに、どういう順序や展開があるか、それと比べて、筆者・作者の採用した構成には、どんな長所が認められるかなどを考えさせる。

説明文の指導では、①どんな内容について説明するのか(説明内容の把握)、②だれに向けて説明するのか(読み手の把握)、③どんな方法・態度で説明するのか(文章構成)、④どのような用語・表現を用いて説明するのか(叙述)ということなどを考慮しながら、何よりも正しい知識・情報の提供を心がけさせることになる。(中略)③構成をすっきりと

説明は、「何か」という問いに対して「こうだ」と明晰に答えることである。その「こうだ」をわかりやすくするためには、あらかじめ構成を整えておくことが大切である。つまり、その知識・情報をまだ知らない人にもよくわかるように説き明かすためには、「何から書き始め、それをどう展開させ、最後にどのようにまとめるか」という順序――構成がすっきりしていることが必要条件となる。

一方、「展開」そのものについては、指導用語辞典ほか^{vii}には「項目」も「索引」にもない。つまり、教育用語ではなく、明確な教育的定義づけなしに一般用語として使われることを意味している。さらに、「場面」や「論理」「根拠」「登場」「人物」なども国語科教育の用語として必要な言葉であろう。用語辞典などでの正確な把握が必要である。全ての言葉について、確認することは控えるが、このように指導用語としての言葉を学習指導要領から抽出することができる。

次に、活動に関わる「動詞」に着目したい。動詞を頻度順に並べると以下ようになる。名詞と同様に、三十回以上出現した語をあげ、本文で具体的に挙げた語については傍線を付した。

書く	示す	読む	考える	話す	応ずる	聞く	もつ	付ける
使う	見る	よる	いう	とらえる	深める	できる	まとめる	
通す	いく	集める	踏まえる	広げる	分かる	取り上げる	伝	
える	話し合う	受ける	求める	育てる	図る	決める	述べる	
表す	かわる	生かす	行う	くる	対する	養う		

領域の言葉である「書く」「読む」「話す」「聞く」は高い頻度で出現する。と同時に、「考える」というキーワードが浮かび上がる。思考としての国語科教育の性質がうかがえる。また、各領域を超えて、「深める」「まとめる」「集める」「広げる」「伝える」「話し合う」「表す」といった言語活動に関する言葉が並ぶ。これらの言葉は、「生きる力」の「生きる」のような一般用語であるが、学習指導要領の中に入るとき、指導用語として学習すべき重要な言語活動を表わす言葉であるこ

とがうかがえる。

今後の展望

学習指導要領の中の言葉は、指導用語として正確な把握が求められる言葉である。そして、この言葉は、教科書という学習材にどのような形で入ってきて、学習者に届くのだろうか。前回から、学習用語に国語科教科書の特徴語を示すことで考えはじめてきたが、たどり着くには今回の指導用語と教科書との関係性が必要であり、次回はそこをを考えていく。

i『漢字と日本人』（高島俊男、文藝春秋、二〇〇一年）

ii平成十七年の中央教育審議会答申（「我が国の高等教育の将来像」および、「中学校学習指導要領解説 国語編」「第一章総説」（文部科学省編、東洋館出版社、二〇〇八年）

iii新学習指導要領の基本的な考え方（文部科学省）
http://www.next.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/

iv『中学校学習指導要領解説 国語編』（文部科学省編、東洋館出版社、二〇〇八年）

v抽出した語は、定義付機能をもつ名詞のみとし、形式名詞や数詞などは除外してある。

vi昭和五十二年度告示の学習指導要領では、「A表現」「B理解」という枠組みである。

vii『国語教育指導用語辞典 第四版』（田近洵一・井上尚美編、教育出版、二〇一二年）

viii『国語教育研究大辞典』（国語教育研究所編、明治図書、一九九一年）、『国語教育辞典』（日本国語教育学会編、朝倉書店、二〇〇一年）、『国語教育総合事典』（日本国語教育学会編、朝倉書店、二〇一一年）

言語活動を最大限に生かした国語科書写教科書

活用する力が発揮できる書写力の育成

帝京大学教授

鉦持 勉 けんもち つとむ

平成二十八年年度版教科書は、特に言語文化、文字文化の担い手を育成することに主眼を置いた。生徒の側に立って生徒の書写力を高めることを追求するとともに、日常生活に役立つ活用する力の育成につなげられるよう編集されている。

一 言語文化、文字文化の担い手の育成

「文字で心を伝えよう」、「文字の変遷」、「文字は残る」などの教材を特設し、言語文化、文字文化の担い手としてどのように国語科書写に取り組みばよいかを明確にしている。

また、「暮らしの文字を支える人々」「社会で生きる文字」などのキャリア教育を意識したページは、次世代の文字



p.28-29 文字で心を伝えよう 1

二 言語活動を重視

言語活動を重視するということは、国語科書写としての特性を最大限に生かした授業を実現することである。

これを積極的に取り入れることで、国語科書写として、目的意識、相手意識、方法、状況、評価といった、「書くこと」における書き手の意識を高めることができる。こうした授業は、生徒の持続する意欲に支えられた授業にもつながる。

三 学び方がわかる

生徒にとって、国語科書写の時間は、自己の書写力を振り返る契機となる。

主要毛筆教材は、目標の他、以下の三ステップで構成される。
考えよう 自己の書き文字がどのような状況にあるか、硬筆・毛筆の関連指導を取り入れた手立てで、実態を確認でき、課題が明確になる。

生かそう 主教材の学

びだけでなく、関連する文字群も的確に取り扱い、活用を促す。同類の傾向のある文字群を硬筆で書くことで、日常生活に生かすことができる。

振り返ろう ここでの

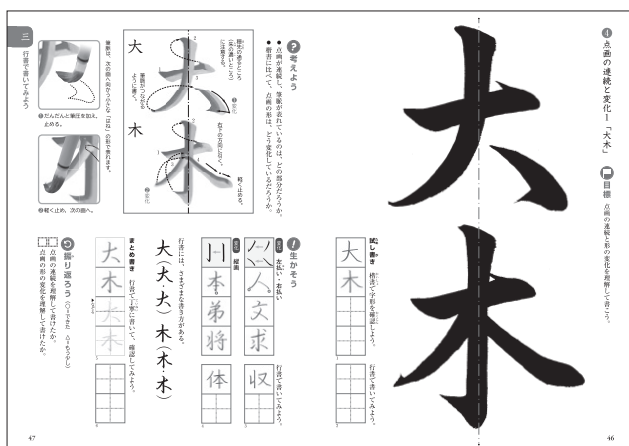
振り返りは、ねらいに対する評価としての振り返りではなく、

一単位時間の学びの習得状況を確かめながら、自己の書写力の状況を把握することをめざしたものである。

この振り返りが次時の学びに確実につながるのである。一単位時間のまとめとして必ず振り返りをするという習慣を重視することにより、主体的な学びをいっそう高めることができる。

四 学年別毛筆教材の系統化

教科書を、三年間分の教材を一冊に収めた合本とすることで、三年間の見通しをもった学びができるようになる。



p.46-47 ④点画の連続と変化1「大木」

一年の「天地」、「いろは歌」で、小学校での基礎・基本の習得状況がどのようになっていくか、基本点画の筆使いは確かか、といった生徒一人一人の状況を的確に把握できる。

また、「大木」、「栄光」、「平和」の三教材は、行書の入門期の教材として、行書の連続に関する特徴を理解し習熟することができる。また、楷書と行書の比較も容易でわかりやすい教材配列となっている。

二年の「初志」、「雲海」、「開花」は、省略、点画の変化に気を付けて書く教材であり、レベルアップをはかるものとして位置づけられる。特に行書の書き味を体得するうえで重要な役割を担っている。

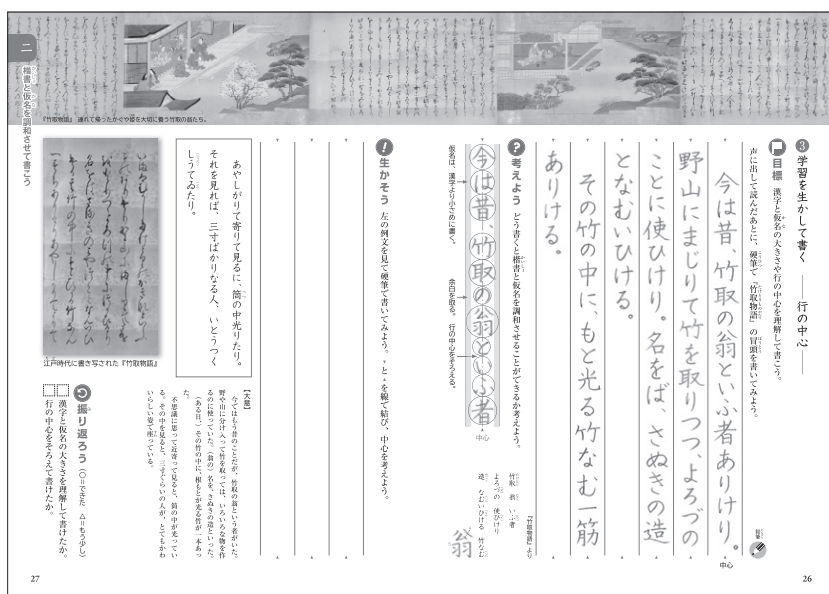
三年の「創造」、「旅立ちの朝」は、行書の書きぶりを深める役割を担う。中学校国語科書写の指導事項に明記されている行書の基礎・基本を、確実に習得できる。



p.42-43 楷書と行書の違い「和」

五 伝統的な言語文化としての役割

さらに、教材として『枕草子』、『平家物語』、『おくのほそ道』などを取り上げることにより、伝統的な言語文化に触れる機会を設定している。速く書く活動との一体的な取り組みを推進していける教材構成になっている。



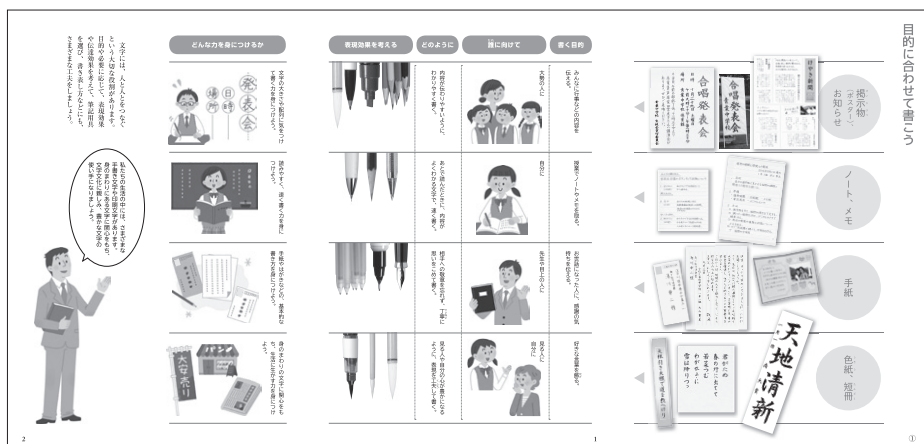
p.26-27 ③学習を生かして書く一行の中心

六 日常生活に生かして効果的に書く活動

国語科書写においては、単に毛筆文字をいかに書けばよいかということだけではなく、

これを日常生活の硬筆にどのように生かすかも求められる。また、日々の生活のさまざまな書く場面で、目的に合わせて筆記用具、用紙などの用具・用材を自己選択できるようにするなど、生活に生きる活動にしなければならぬ。その意味でも、多様な場で多様な書き文字を臨機応変に書ける力が求められよう。

本書は、相手意識、目的意識を強くもって学ぶことで、持続する意欲に支えられた学びが可能になる構成となっている。

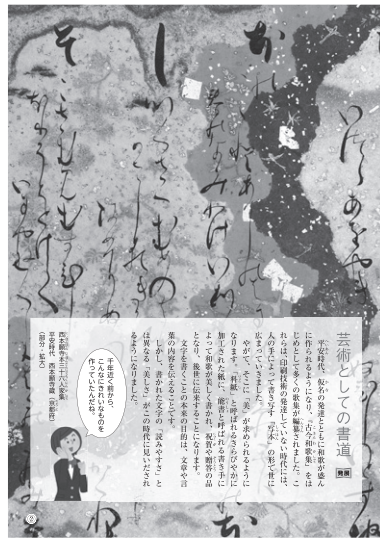


口絵 目的に合わせて書こう

七 国語科書写から芸術科書道へ

「文字の変遷」、「あの人が残した文字」、「芸術としての書道」などの教材をおして、言語文化、文字文化の継承者としての書き手を育て、美の世界、美を鑑賞する社会の担い手であることを意識できるようにしている。

文字への関心を育てるとともに、効果的な文字を書く活動を積極的に取り入れることで、次代の国語科書写の担い手として関われる場が設定されている。



裏表紙 芸術としての書道

八 生徒の側に立った使いやすさ

学年別の学習時間に合わせて見通しのある学びが保障されている。多様な目的に合わせて書く活動が設けられており、効果的な学びができるようになっていく。自己の課題に合わせて振り返ることもでき、国語科書写の学びに対する意欲がわくように構成されている。

さらに、「考えよう」、「生かそう」、「振り返ろう」の学習過程は、

生徒の側に立って学びを構築していることが理解できるであろう。

一単位時間の流れを身につけることで、指導者と学習者の両者にとって授業が取り組みやすいものとなり、より授業に集中できるようになる。

特に、楷書から行書への移行については、基礎・基本を徹底したうえ、難易度を感じさせないようスモールステップを積極的に取り入れた。速く書く行書に対する生徒の抵抗が少なくなるよう教材を構成してある。

九 紙面デザイン力の強化——よりわかりやすく

紙面のデザイン性を高め、生徒にわかりやすく、書くことの活動を興味・関心をもって体験できるものとした。どのような学習活動をしているかはもちろん、文字を書く活動がもたらすさまざまな「伝える力」がいかに重要であるかが理解できるだろう。

こうしたデザイン性の強化により、生徒が体験や経験の必要性、目的に合わせて書くことの重要性をより具体的に理解することができるといえる。

平成二十八年度版教科書は、これまで以上に生徒の側に立つことをめざした。学び方が着実に身につく、目的に合わせて書くことの大切さを明示している。

「学ぶ力」「学んだ力」「学ぼうとする力」が身につく、次代の文字文化の担い手を育成できる教科書として活用されたい。

編集部より

「道標」二〇一五年春（第三十）号をお届けいたします。

本誌では、平成二十八年四月から使用されます、新版教科書につきまして、特集などを組んで紹介ページを設けました。

近年、「学力向上」が国語科の大きな課題の一つとなっております。興味・関心をもちながら、一年を通じて、無理なく自然と「言葉の力」が身につく教科書をめざして、編集業務を行っています。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

読者プレゼントのお知らせ

まはら三桃先生の直筆サイン入りの著書を、抽選で三名のかたにプレゼントいたします。

郵便はがきに、お名前、ご住所を明記のうえ、左の宛先までお送りください。（締切は、二〇一五年五月末日消印有効）

発表は発送をもってかえさせていただきます。なお、お寄せいただきました個人情報は、プレゼントの発送にのみ使用させていただきます。

〒一〇一〇〇五一 東京都千代田区神田神保町二一〇

教育出版株式会社 国語編集部

「道標」二〇一五年春号プレゼント係

絵画・写真

朝日新聞社／アマナ／植田まさし／越智貴雄／折原恵／京都市美術館／JTB
フォト／時事通信フォト／天理大学附属天理図書館／ナカジマアート／日本近代
文学館／ビブリオバトル普及委員会／万作の会／©中野義樹



教材品のご紹介

*は、新版教科書準拠版を発行予定。

*中学国語デジタル教科書

〈本体70,000円＋税／新版価格未定〉

中学国語DVD

〈本体15,000円＋税〉

*中学国語学習ノート

〈本体552円＋税／新版価格未定〉

*中学国語漢字ノート

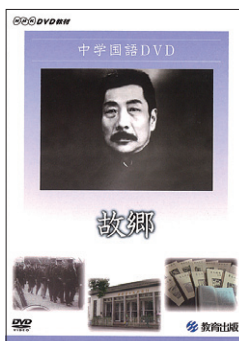
〈本体324円＋税／新版価格未定〉

中学文法

〈本体438円＋税〉

*中学書写硬筆練習帳

〈本体362円＋税／新版価格未定〉



中学国語通信 道標 (2015年 春(第30)号)

2015年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

印刷：大日本印刷株式会社

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング 3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007	福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411